

追悼の言葉

本日ここに、各会のご来賓はじめ、県内各地から遺族が集い、令和三年度福岡県戦没者追悼式が挙行されるにあたり、戦没者の遺族を代表いたしまして、謹んで追悼の言葉を申し上げます。

今年も私たち遺族にとりまして忘れることができない日、八月十五日を迎えました。先の大戦において祖国の平和と発展、家族の安泰を念じながら、戦場に散り、戦禍に倒れ、あるいは異境の地において帰らぬ人となられたご英霊のご無念、苦しみを思う時、尽きることのない悲痛な思いが胸にこみあげてまいります。

私ごとですが、父は、昭和十九年九月十四日、中国雲南省騰越城北門にて、玉碎千八百名、その一人と知らされております。父、三十五歳でした。

戦死した当時、私の家族は、年老いた祖父、祖母、そして母と二歳の妹と私が四歳の、五人家族でした。父の顔も記憶も全くありません。それからは、母親一人で大変な苦勞しながら家族をささえてくれました。

一度は行ってみたい、父がどんな所で最後をとげたか、自分で確かめたいと、日頃から思っていました。平成二十二年、福岡県遺族連合会主催により、中国雲南地域友好親善訪問団に参加することが出来ました。雲南省騰越城北門一帯は、きれいに整備された町並みでした。

日本軍司令部跡は小学校が建てられていました。学校の裏には広い広い沼地があり、現地のガイドさんの説明では、この沼地には、多くの日本の兵隊さんが眠っておられますと説明を受けました。もしかしたら、私の父もここに眠っ

ているのではと思いました。

騰越城北門にたたずんだ時には、なぜ、こんな遠い異国の地でどんな思いで最後をとげたのかと思うと、目頭が熱くなり静かに手を合わせました。

「お父さん」と呼んだことは今まで一度もありません。初めて「お父さん!! 逢いに来ました」と心の中で叫びました。道路の小石一個を拾い、一緒に自宅へ持ち帰り、お墓へ参り、父の白紙一枚がはいった骨壺に小石を納め、少しは安堵した気持ちになりました。

再び悲惨な戦禍を繰り返すことなく、万世の平和、命の大切さを、先の大戦から学び取った多くの教訓を、子々孫々まで正しく継承し、平和な社会の発展に寄与することを、遺族一同、努力を続けて参る所存であります。

郷土、福岡の発展の礎となられたご英霊に感謝し、二度と私達のような戦没者遺族を出してはなりません。

本日は、新型コロナウイルス感染防止に最善の注意をし、厳かに追悼式を挙行していただきましたこと、心から感謝申し上げます。

結びに、ご英霊のご冥福と我が国の平和と発展、ご参列の皆様のご健勝とご多幸を祈念申し上げ追悼の言葉といたします。

令和三年八月十五日

遺族代表

野 田 清